

2022. 7. 3 (日) 使徒2:25~31

2:25 ダビデは、この方について次のように言っています。『私はいつも、主を前にしています。主が私の右におられるので、私は揺るがされることはありません。』

2:26 それゆえ、私の心は喜び、私の舌は喜びにあふれます。私の身も、望みの中に住まいます。

2:27 あなたは、私のたましいをよみに捨て置かず、あなたにある敬虔な者に滅びをお見せにならないからです。

2:28 あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前で、私を喜びで満たしてくださいませ。』

2:29 兄弟たち。父祖ダビデについては、あなたがたに確信をもって言うことができます。彼は死んで葬られ、その墓は今日に至るまで私たちの間にあります。

2:30 彼は預言者でしたから、自分の子孫の一人を自分の王座に就かせると、神が誓われたことを知っていました。

2:31 それで、後のことを予見し、キリストの復活について、『彼はよみに捨て置かれず、そのからだは朽ちて滅びることがない』と語ったのです。

<説教>

使徒ペテロはイスラエルの民に向かって、「神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは十字架につけて殺したのです。」(23)と言いました。そう言って、神が聖書の約束どおりこの地上に彼らのために送ってくださったイエスを救い主キリストだと認めず、拒んで殺した彼らの罪を指摘しました。そして更に言いました。「しかし神は、イエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです。」(24)と。「イエスが死につながれていることなどあり得なかった」のは何故か？それは、イエスがユダヤの律法学者や長老たちに引き渡され、異邦人ピラトに引き渡され、そうやってイスラエルの民によって十字架につけられて殺されたことが「神が定めた計画と神の予知によって」のことだったのと同じように、神がイエスを死の苦しみから解き放ってよみがえらせたこともまた「神が定めた計画と神の予知によって」のことだったからです。それ故に神はダビデの口を通して既にお語りになっていたのだとペテロは言うのです。イエスが苦難を受け十字架で死なれ、そしてよみがえらされたことによって、イエスが確かに神の約束の救い主、キリストだということが明らかになったのだとペテロは言うのです。

「ダビデは、この方について次のように言っています。」と言ってペテロは詩篇 16 篇 8 - 11 節 (七十人訳) を示しました。この時のペテロの説教を聞いていたイスラエルの民は当然この詩篇を知っていました。しかしこの詩篇はイエスについて言っているのだとペテロが言ったことには驚いたに違いありません。確かにこの詩篇は直接的にはダビデがいつも主なる神を信じ、主に依り頼み、主との固い交わりの中に生きていること、それ故に心にも口にもいつも喜びと感謝があふれ、霊肉ともに望のうちに生きていることを告白しています。更にその望みは死さえも主とダビデの固い交わりを引き裂くことはあり得ず、必ず「あなたは、私のたましいをよみに捨て置かず、あなたにある敬虔な者に滅びをお見

せにならない」(27)という主に対するダビデの信仰を大胆に告白したものです。主が教えてくださり自分が歩んでいる道はいつもどこまでもいのちの道であり、決して死の道ではないと喜びにあふれてダビデは確信をもって告白したのです。その意味でこの詩篇で高らかに告白されていることは、ダビデ自身のよみがえりの確かな望みことだと言うことができます。しかしペテロは〈確信をもって(つまり「大胆に」)〉(29)この詩篇でダビデは〈後のことを予見し、キリストの復活について、『彼はよみに捨て置かれず、そのからだは朽ちて滅びることがない』と語った〉のだと言いました(31)。

何故なら、〈彼は死んで葬られ、その墓は今日に至るまで私たちの間にあ〉る(29)からです。そのことも「あなたがた自身をご承知のことです」(22)とペテロは言うのです。「あなたは、私のたましいをよみに捨て置かず、あなたにある敬虔な者に滅びをお見せにならない」とダビデは告白しましたが、当時(今なおそうですが)ダビデはまだ死人の中からよみがえらされてはいませんでした。〈ダビデは、彼の生きた時代に神のみこころに仕えた後、死んで先祖たちの仲間に加えられ、朽ちて滅びることになりました。〉(13:36)と後に使徒パウロもイスラエルの民に言っています(なお、「朽ちて滅びること」(31節)と「滅び」(27)は同じ語です)。ではダビデは空しい叶わない儂(はかな)い希望を言っただけだったのか、またはありもしない大言壮語を吐いたのでしょうか。〈彼は預言者でした〉(30)とペテロは言うが、ダビデは「偽」預言者だったのでしょうか。そうではありません。彼は〈彼の生きた時代に神のみこころに仕え〉、〈自分の子孫の一人を自分の王座に就かせると、神が誓われたことを知ってい〉た(Ⅱサムエル 7:12、詩篇 132:11)本当の〈預言者〉でした。神の約束の救い主キリストはダビデの子でありダビデの王座に就く者だということはイスラエルの民は皆知っていました。イスラエルの〈父祖ダビデ〉はそのことをずっと先に知っていて、その〈自分の子孫の一人〉キリストのことを預言したのだとペテロは言ったのです。ダビデは〈キリストの復活について〉も知らされていた、〈神が誓われたことを知っていた〉とペテロは言ったのだと考えていいでしょう。神の民をその罪から救うために、苦しみを受け、十字架で死なれ、復活させられてこそ〈預言者〉ダビデが預言していた神の約束の救い主キリストである、そしてナザレ人イエスこそがそのキリストに他ならないとペテロは〈確信をもって言うことができます〉と自分の〈兄弟たち〉イスラエルの民に語ったのです。確かに父祖ダビデ自身もやがて神によって死人の中からからだをもってよみがえらせられる。しかし、今はまだダビデは復活させられていない。死んでも生きるいのちをもってからだごと復活させられたのは、あなたがたのイスラエルの人々が苦しめ、十字架で殺し、しかし神によって復活させられたナザレ人イエスだけである。偉大な父祖ダビデは、大事なことは自分の復活よりむしろ〈自分の子孫の一人〉(すなわちイエス)の復活を信じ、イエスをあなたがたの神の約束の救い主キリストだと信じるこそが大事であると証ししており、それがいつまでも神とともにある、どんなときもいつまでも決して揺るがされることのない、たましいとからだのすべてに幸いな喜びに満たされるいのちの道であると証ししているのだ。そうペテロはイスラエルの民に語ったのです。

今日、私たちもダビデを通し、またペテロを通して同じく聖霊によって主イエス・キリストから語りかけられ、促されているのです。

しかしペテロは、ダビデが〈この方〉、つまり死につながれていることなどあり得ず、神によって死の苦しみから解き放たれよみがえらされたイエス(24)について言っていると言
い、ダビデが〈この方〉イエスを〈主〉と呼んでいると